

雑誌『新建築』にみる大正から昭和初期の関西の住宅

—— 阪神間のモダニズム住宅 その4 ——

Houses in Kansai-area during the Taisho and the beginning of the Showa eras in the journal “SHINKENCHIKU”: Modern Houses in Hanshinkan-area Part 4

田 中 栄 治

キーワード：阪神間、モダニズム、住宅、『新建築』、昭和初期

1. はじめに

前稿^{*1}では、大正期に大阪で発行されていた雑誌『住宅研究』に掲載された記事を調べることにより、当時の関西における住宅設計を取り巻く状況についての考察を行った。

当時は、伝統的家屋の因襲的生活や、明治以降の和洋の「二重生活」に対して、新しい時代の新しい生活が求められていた。その中で登尾源一により大阪に組織された「住宅改造会」の活動は、より近代化された生活、つまり家族本位の、安全で、明るく、衛生的で、楽しい生活、いわゆる「文化生活」を広めることに重点が置かれていた。そのためには、簡便で、安全で、無駄がなく、衛生的で、快適で、安価な住宅、いわゆる「簡易住宅」が求められたのである。

しかし、より実践的な活動まで視野に入れていた住宅改造会としては、実際には住宅の「洋風化」というより現実的な提案にとどまり、和洋をいかに統一的に折衷するかがテーマであった。そのとき、和と折衷するための「洋」としてミッション（スパニッシュ）スタイルやバンガロータイプが適しているとしていた。それは、和洋折衷に適した「洋」のモデル探しと、その折衷方法を探す作業であったといえる。

ただし、そこにみられる「並列型」和洋折衷から「統一型」和洋折衷への変化にこそ、この時期の住宅改造そして生活改良の重要性があると考えられる。そして、大正末期には、モダニズムやライト式などの欧米の新しい建築形式や、分離派にみられる日本の新しい建築デザイン運動の影響が住宅にも現われてくるのである。

「住宅改造会」の機関誌『住宅研究』は1921（大正10）年1月に創刊し、1925（大正14）年には廃刊されている。廃刊の正確な時期は不詳であるが、住宅改造会の同人でもあった吉岡保五郎が、1925（大正14）年8月に大阪で雑誌『新建築』を創刊したことにより、『住宅研究』

はその役割を終えたといえる。『新建築』は、1931（昭和6）年に発行所を東京に移転し、現在まで続いている。

この稿では、雑誌『新建築』が大阪で発行されていた時期に掲載された記事を調べることにより、前稿に引き続き大正から昭和初期の関西における住宅設計を取り巻く状況についての考察を行う。

2. 雑誌『新建築』

1925（大正14）年8月1日発行の雑誌『新建築』創刊号（図-1）冒頭で、吉岡保五郎は「創刊の辭」を掲載している。その中で、『新建築』の領分する使命として「建築界の全班に跨る」としつつも、「當面の任務としては、主として住宅の研究紹介に力め『住』に關する諸問題にも、涉ることとする」と述べている。表紙にも「住宅之研究雑誌」と記されている。これにより、大正期の建築界で「住宅」を取り巻く諸問題が大きなテーマになっていたことがわかる。また、住宅研究は個人の問題ではなく広く社会的な問題であるとし、以下のように記述している点も注目すべきである。

殊に日本に於ける今日の住宅問題は他の國の如く趣味享樂の上より出づるとは、事情を異にし、現代文明に順應せんがための、必要より出でたる、切實の研究問題である。

ここでは、明治期以降の日本の近代化のなかで、特に大正期には住宅の問題が社会的に非常に切実なものであったことがわかる。さらに、住宅研究は「住宅の結構様式のみならず、直ちに生活改善の項目にも渉らなければならない」としている点は、吉岡も同人であった登尾源一による住宅改造会、あるいは東京の橋口信助による住宅改良会と同じ考えであったことがわかる。

そして、住宅研究が究めるべき項目が甚だ複雑であるとしつつ、「伝統的の生活様式に、一改革を加へんとすることも、容易のことではない」とし、封建社会の影響が残る日本の伝統的な生活様式が改革の対象となっていたこともわかる。

また、編集後記には「住宅の建築は専門家のみに一任するのではなく大體のプランは各自に工夫することがもつとも良いこと」とであるとし、そのための知識がまず誰にも必要であるとしており、「そういふ方面の研究資料を、成るべく多く記載することに力めます」としている。このことから、創刊当初は建築家などの専門家だけではなく、広く一般の読者を対象としてい

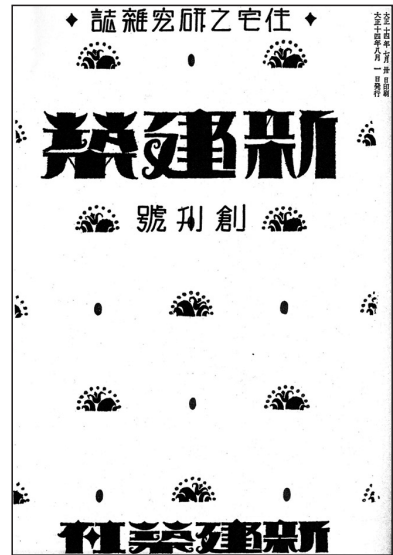


図-1 創刊号表紙
『新建築』1925（大正14）年8月号

たことがわかる。

このように、雑誌『新建築』は住宅改造会の機関誌『住宅研究』の理念を受け継ぎながら、日本の近代社会にふさわしい生活、あるいは住宅とはどうあるべきか、その究明を目的として創刊された雑誌であり、それを専門家だけでなく一般に広めることを目標としていた。設計製図の仕方からはじまって、建築史、各室の機能、構造、設備、建材、家具、家相から庭の手入れにいたるまで、幅広い分野について一般に対してもわかりやすい記事が掲載されている。

以下、本稿では特に一般向けの企画となっている記事を中心にみていくこととする。

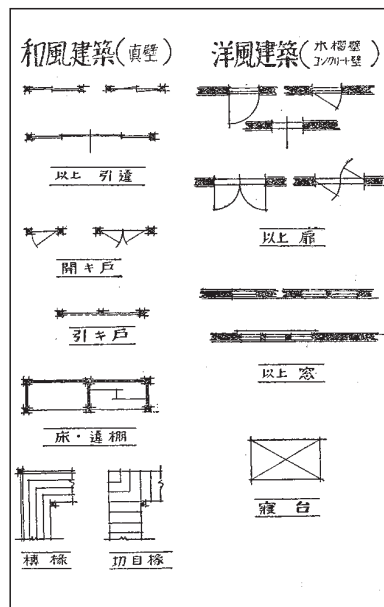
3. 建築家と社会

『新建築』創刊第2号となる1925（大正14）年9月号に、神戸大学工学部の前身である神戸高等工業学校教授である永澤毅一による「建築家と社会」が掲載されている。永澤は、建築家が広く住の問題に関与する立場にあることから、建築家と社会との間には常に密接な交渉が存立すべきははずであると考えつつも、実際にはむしろ反対のようであるかにみえるとしている。当時は、いわゆる「文化生活」が唱えられ、衣食住に関する研究が盛んに行われており、住居に関しても様々な方面から意見や創意があった。しかし、それらは所詮「豊かに家を建て得る人々」へのものに止まっており、多くの民衆には寄与に値しないものであるとしている。永澤は社会民衆のための市井の住宅こそ「建築としてより本質的であり従つて建築家の尋常ならぬ考量を費す事によつてのみ其完成を期圖せらるるものである」と考え、建築家が社会に対して重大なる責任を感じるとともに、社会一般と建築家がそれぞれ自ら接近することにより、建築からの社会の改造ができると考えている。

『新建築』では、創刊当初からフランク・ロイド・ライト設計の山邑邸（1924（大正13）年）や藤井厚二自邸など、建築家の設計した住宅の解説を掲載する一方で、永澤の記事に応えるように「住宅の設計製図の仕方」や「設計問答」など一般向けの企画を掲載している。

4. 住宅の設計製図の仕方

「住宅の設計製図の仕方」は、工学士元良勤により創刊号から4回にわたり連載された、一般向けの比較的簡単に住宅設計図面を作成する方法を解説した記事である。住宅の意義や機能について説明した総説から、土地の選定やプランニングなどの設計法の解説、さらには製図用具、陰影法や着色法などの各図法などの製図法の紹介ま



図ー2 住宅の設計製図法
『新建築』1925（大正14）年10月号

で、住宅の設計を専門家にのみ任せるのではなく、各自で工夫するための方法を解説している。(図-2、3)

そのなかで、住宅のプランニングについては、まず建築様式と周囲の風光等を含む土地の調和が重要であると指摘したのち、「吾人の住宅は、何處までも吾々一家のものであると共に、又、吾人社會の一部を形造るものであり、更に進むで此の美しい大自然の中に存在しているのだと云う事を、決して忘れる事は許されない」として、住宅の公共性が重要であると指摘している。

また、敷地内のプランニングについて述べている点を列記すると、以下のようになる。

- ①家を包む敷地全体を自分の住宅と考える
- ②自然をできるだけ利用する
- ③敷地の地理を利用する
- ④隣接住宅との関係をよく考慮する
- ⑤庭と建築との関係をよく考慮する

このなかでも特に⑤の庭と建築の関係については、「各室と庭とのつながりを精細に考へて、建築と庭とを一體としてよく考慮を巡らす必要がある」としており、日本の伝統的な建築にみられるような内部空間と外部空間の一体性が重要であるとしている。

さらに、建築のプランニングについては、必要な室をまず書き並べてみて、さらに各家族によって起こるいろいろな条件をもあわせて、はじめに列挙しておく必要があるとしたうえで、プランニングのいくつかの方法を記載している。列記すると、以下のようになる。

- ①敷地条件から門の位置が決まると、それに合わせて玄関の位置が決まり、それを中心に各室を便利よく配置するように工夫していく方法
- ②その家庭で最も重要と考えられる部屋を最も向きのよい理想的な場所にまずとっておいて、次にこれらに付随してくる部屋を最も便利ように付け足していく方法
- ③最初に家全体の形を、長方形やかぎ型、あるいは十字型などに定めて、その形の中に納まるように各室を割り当てていく方法
- ④すでにできている庭あるいは周囲の風光を利用するために、全くこれらの外的条件を基礎としてプランニングを進めていく方法

住宅を、主要な部屋から順番に空間を配置して連結する内側から決定していく方法や、まず

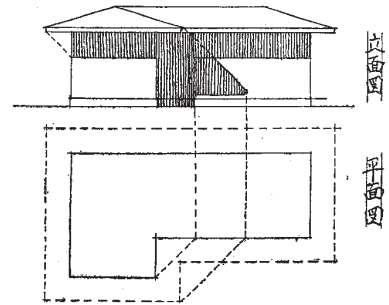


図-3 陰影法

『新建築』1926（大正15）年1月号

建物の形を決めてから内部空間を分割する外側から決定していく方法とともに、敷地条件や庭や敷地周辺の外的条件の重要性も指摘している。ここでは、古い風習やしきたりではなく、合理的にプランニングをする方法が説明されている。

さらに、住宅を融通が利くようにしておくことが必要であるとしている。洋風の住宅で間仕切りを開放的にして単にカーテンなどで仕切ったものや、広い居間を家具の配置で様々な目的に用いたりすることは、経済的理由や家族本位のプランニングなどとともに、融通が利くようにするという点からみてもたいへん面白いとしている。また、従来の日本の住宅でも襖を外すことによって二室を一緒に用いたり、居間を夜には寝室として用いたり、部屋の融通がよく利き誠に巧みなやり方であるとし、伝統的な日本の住宅についても合理的な視点から再評価している。

5. 設計問答

この時期、新建築社は設計相談部を設け、一般からの住宅設計に関する相談を受けている。創刊第2号である1925（大正14）年9月号から1年余りの間に「設計問答」として9回掲載された。その目的は「読者の質問に應答するための欄であつて、住宅庭園家具室内備品等の設計考案を相互に研究しやう」というものである。

最初の質問は神戸に住む読者が考案したプランについて、どのような家ができるか、建築家がみての批評そして訂正すればどうなるか、敷地内での家の配置および庭園の提案というものである。（図-4）これに対し、応答責任者として新建築社設計相談部依頼の岡田工学士が回答している。この岡田工学士は岡田孝男のことであると考えられる。

回答としては、まず読者が考案したプランに基づいて立面図をつくって示している。（図-5）その外観はクリーム色の壁に赤瓦というミッションスタイルとしてお

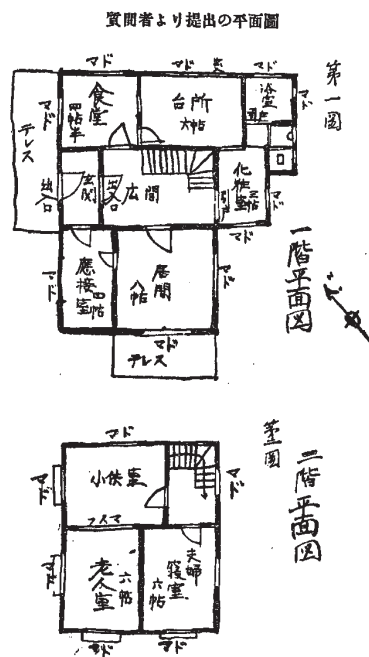


図-4 読者より提出された平面図
『新建築』1925（大正14）年9月号

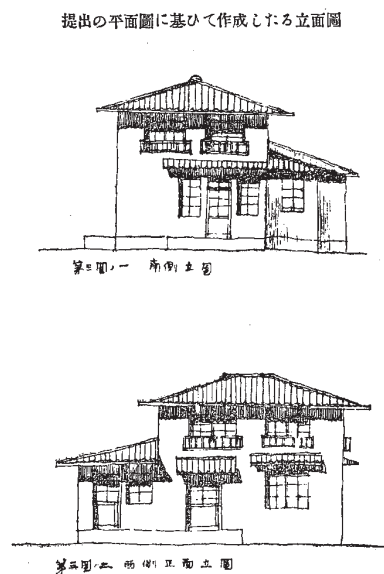


図-5 読者より提出された平面図に基づいて作成された立面図
『新建築』1925（大正14）年9月号

り、当時のはやりをよくあらわしている。

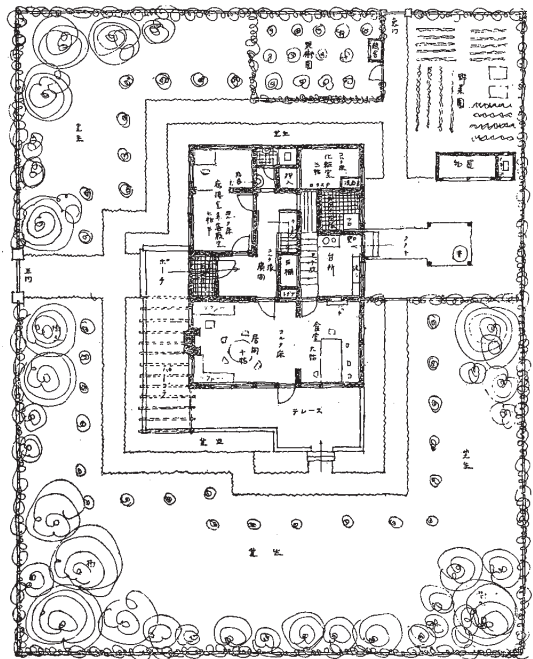
つぎに、プランに対する批評としては、住宅は各人の趣味が多分に入っているので批評はなかなか難しいと前置きした上で、プラン各部についてのコメントを記載している。それらを列記すると以下ようになる。

- ①居間、食堂を広くとり外光を十分に入れている
- ②台所がきちんと確保されている
- ③台所と食堂を隣り合わせとし、調理したものをハッチからすぐ食堂に送ることができる
- ④台所と浴室を隣り合わせとし、浴槽の焚口を台所に置いて台所で働きながら焚口に気をつけることができる
- ⑤浴室と化粧室と便所の配置連絡がうまくいっている
- ⑥広間が大きくとってあり玄関を入った時に広々として気持ち良い
- ⑦二階に上がる階段もゆっくりしていて良い
- ⑧居間の前のテラスも良い

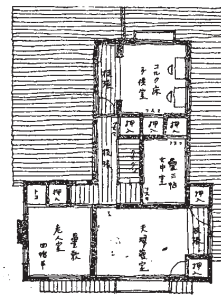
以上は、岡田が読者から提出された平面図の良い点として挙げたものである。

①②は当時さかんに言われていた家族本位の住宅にとって必要な要件である。因襲的な接客中心の住宅に対する家族中心、個人中心の近代的住宅に必要な要件として、岡田もおおいに賛意を表している。

③～⑤は住宅の機能面での合理性を指摘している。このころ、日本の伝統的な家屋は江戸時代までの封建的な因襲にとらわれて、機能的な合理性を欠いているという議論が盛んに行われていた。岡田は、この8年後の1933（昭和8）年に雑誌『建築と社会』に2回に分けて「小住宅プランの研究」という記事を掲載しているが、そこで日本人の近代的な生活にふさわしい住宅のプランを合理性という面から評価しようと試み



第四図 訂正した平面図及庭園設計図



第五図 訂正した平面図四階

図一6 岡田により訂正された平面図
『新建築』1925（大正14）年9月号

ているが、ここでも合理性という視点からの評価を行っている。

⑥⑦は住宅の内部空間にゆとりを与える部分であり、⑧は内部と外部を繋ぐ部分についての指摘である。岡田が「住宅にはこう云うノンビリした要素も大切です」と書いているように、これらは当時のいわゆる「文化生活」を実現するための要素である。

『新建築』を読んで投稿をするような住宅に興味のある熱心な読者であるとしても、一般から寄せられた住宅のプランにそれらの要件が含まれているということは、「文化生活」のための「簡易住宅」の必要性の議論は専門家のなかだけではなく、一般のなかにも一部広まりつつあったことがわかる。

また岡田は改良したい点として、応接室への動線や広さ、テラスの広さ、台所と食堂の配置、老人室への動線、押入の量、女中室や客室の必要性などの言及したのち、建築家として訂正したプランや立面などを提示している。(図-6、7、8)

おもな訂正方針を列記すると以下ようになる。

- ①各室の必要とする大きさ、配置連絡等を整理する
- ②いずれの室も家の一部としての役割を完全に果たせるようにする
- ③各室が有機的に結合して引き締まっているようにする

これに基づいて、岡田によるプラン訂正の具体的な内容を列記すると以下ようになる。

- ①応接間は居間の隣にある必要はない
- ②食堂と居間のごく緊密な関係がある
- ③応接間を独立させて広くし、引き倒し式の寝台を置いて来客が宿泊することも可能にする
- ④台所、浴室、化粧室、便所をそれぞれ連絡させる
- ⑤テラスを広くする
- ⑥パーゴラを設置してテラスに変化を持たせるとともに西日も防ぐ
- ⑦2階に女中室をとる
- ⑧2階に押入を増やす

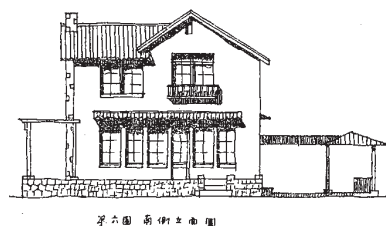


図-7 岡田により訂正された立面図
『新建築』1925(大正14)年9月号

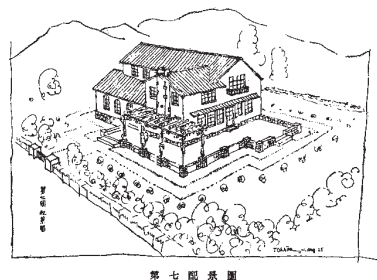


図-8 岡田により訂正された透視図
『新建築』1925(大正14)年9月号

⑨老人室に押入と床の間をつける

⑩子供室を一部板張りにし、工作などの作業に使う

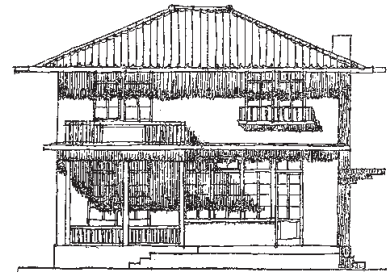
訂正内容は、生活に合わせて各部屋の構成を変更し、全体のまとまりを整理し直したかたちになっている。①～③は家族本位の住宅における居間中心の間取りをより徹底したものである。家族本位の住宅における中心的空間である居間を、家族で食事をする食堂と連続させることにより、より広く便利に使えるとしている。読者から送られてきた平面図で利用頻度の低い接客空間である応接室が南側の最もいい場所に位置していたのに対して、家族のための空間である居間と食堂を環境の良い南側に持ってきて応接間を独立させて北側に移動している。その一方で、応接間を広くして引き倒し式の寝台を設置し、宿泊する来客に対応できるように工夫している。

④は家事動線をできるだけ短くするように配慮したもので、当時の「文化生活」を実現するための「簡易住宅」の目標のひとつである家事労働の軽減を意図したものである。同様に⑤⑥も「文化生活」のための住宅のゆとりを生み出すものである。

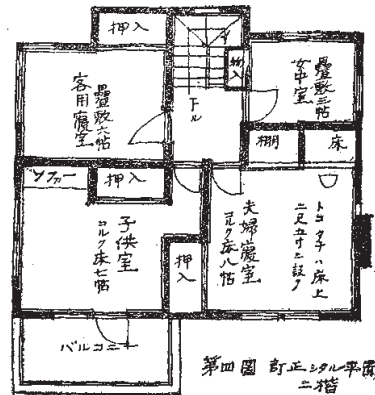
岡田による訂正内容は、読者から送られてきた平面図に対して、家族本位のためのプランニングをより徹底させ、「文化生活」のための「簡易住宅」実現のために各部屋の機能性、合理性を高めて、家全体をより有機的に結合させて引き締めることを目指している。

また、これ以外の全9回の「設計問答」に寄せられた読者からのそれ以外の質問について列記すると、以下のようになる。

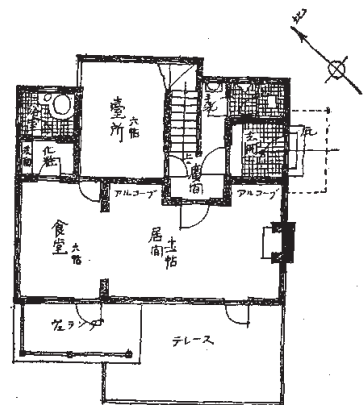
- ・住宅設計の上手な建築家について
- ・設計・監理料金について
- ・材料の内訳について
- ・建築家への設計依頼の取り次ぎ
- ・壁付け塗込め暖炉について



第七圖 南面透視図



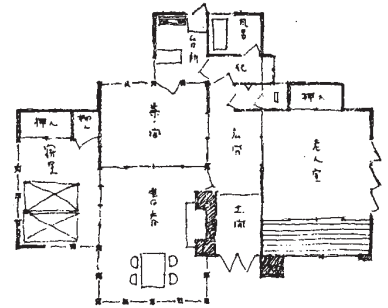
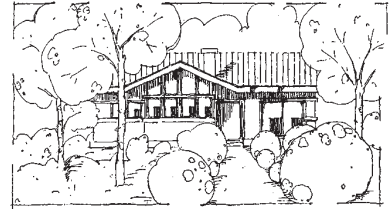
第四圖 訂正シタル平面
二階



第九圖 訂正シタル平面
一階

図-9 八千円でできる家 回答図面
『新建築』1926（大正15）年1月号

- ・ポーチ、ベランダ、テラスの意味
- ・書斎の増築について
- ・建築家になりたい婦人
- ・八千円でできる家（図－9）
- ・西洋建築の様式について
- ・桜ヶ丘住宅について
- ・英国風郊外住宅について
- ・工事費の明示された家について
- ・真四角の土地に建てる家
- ・洋風住宅の庭について
- ・二十坪前後の家について（図－10）
- ・庭園の設計
- ・事務所付き住宅のプランニング
- ・浄化装置について



図－10 二十坪前後の家 回答図面
『新建築』1926（大正15）年7月号

住宅の様式から建物の部分に関すること、材料や設備、庭について、さらには建築家や設計、工事費まで、幅広い質問が寄せられている。これらから、大正から昭和初期にかけて、専門家だけではなく一般にも住宅に対して高い関心を寄せる人たちがいたことを示している。

これらの質問の中で、住宅の様式については「洋風」「英国風」「ライト式」「バンガロー風」という言葉が多い。ここでも和洋統一のための「洋」のモデル探しを西洋の様々な様式に対して行っていたことがわかる。

6. 小住宅設計図案懸賞

『新建築』1927（昭和2）年2月号の巻末に「小住宅設計圖案縣賞募集」の記事が掲載されている。郊外に建つ建坪25坪以内の平屋または2階建ての住宅ということ以外は、敷地の位置や面積、建物の様式などは設計者の随意とするという条件での設計提案の募集が行われた。入選発表は同年6月号誌上で行われ、7月号に入選作品の図面とともに岡田孝男による「應募設計審査報告感想及批評」が掲載されている。

応募総数は187通で、岡田は少し無謀であると前置きしつつも、それらを設計案の様式で分けている。列記すると以下ようになる。

- ①スパニッシュ、ミッシェンおよびイタリアン・ヴィラ 45案
- ②ライト 34案
- ③コロニアル 12案

- ④バンガロー 10案
- ⑤ドイツ風 10案
- ⑥コンクリート造近代式 8案
- ⑦イングリッシュ・コテージ 5案
- ⑧ヌーボー式 5案
- ⑨オランダ式 4案
- ⑩フランスヴィラ風 3案
- ⑪構成派 3案
- ⑫スイス・コテージ 2案
- ⑬純和風 2案
- ⑭プエプロ 1案
- ⑮雑 43案

ここでは、スパニッシュ系、ミッション系およびイタリアン・ヴィラはよく似ているので一緒に数えており、この様式が最も多かった。次いでフランク・ロイド・ライトの作風に似たものが多く、これら2つの様式が他のものより多数を占めている。第1等当選案もライト式となっている。(図-11)

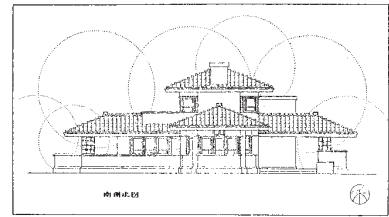
その他にコロニアルやバンガローなどとともに、コンクリート造近代式やヌーボー式、構成派などの欧米の新しいスタイルも取り入れつつ、幅広い様式が提案として出てきていることがわかる。

その一方で、純和風は非常に少ない結果になっている。岡田は「日に日に進む新生活に適應すべく、和風住宅も當然變化し、發展すべき」であるとし、和風住宅に応接間のみを洋風にした並列型和洋折衷の「調和のないチグハグな怪建物」を何とか解決する必要があるとしている。

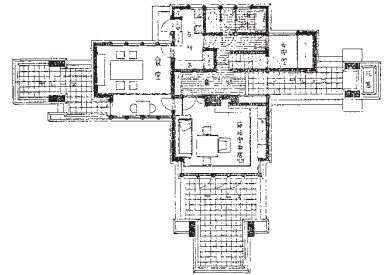
7. 住宅様式の話

『新建築』1928(昭和3)年5月号には、岡田孝男による「住宅様式の話」が掲載されている。ここで取り上げられている住宅の様式を列記すると以下のようになる。

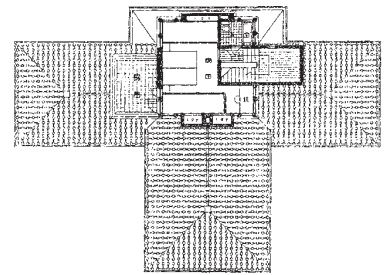
- ①イングリッシュカッテージ



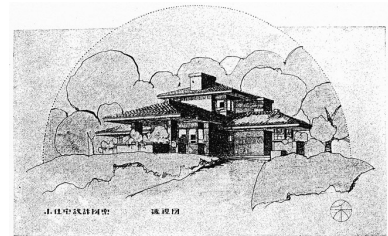
第1等當選案 南側立面



第1等當選案 壹階平面圖



第1等當選案 貳階平面圖



第1等當選案 透視圖

図-11 小住宅設計図案懸賞1等
『新建築』1927(昭和2)年7月号

- ②ミッション式
- ③イタリアン・ヴィラ
- ④スイス・カッテージ
- ⑤バンガロー
- ⑥コロニアル式
- ⑦ドイツ近世式
- ⑧オランダ近世式
- ⑨フランス近世式
- ⑩アール・ヌーボー式
- ⑪セセッション
- ⑫表現派
- ⑬シカゴ派
- ⑭純粋派（図-12、13）

欧米の伝統的な様式から、それらに改良を加えた近世的な様式、さらには特定の建築家の作風に基づく近代的なものまで、様々な欧米のスタイルが日本に紹介され、住宅設計の参考にされていたことがわかる。

その中で、岡田が石本喜久治とともに「純粋派」と名付けたコルビュジェやグロピウスなどによる当時のヨーロッパでの最も新しいスタイルであるモダニズムの住宅が紹介されている。ここで岡田は純粋派の特徴として「建築が要素的に純化された形をとり、洗練された簡明な様式」であるとし、形ばかりでなく建築の本源的な要素についての純化を目指した点を特に評価している。ただし、ここでのモダニズム住宅の扱いは他の様式と同列に扱われており、統一的和洋折衷の「洋」のモデル探しの域を出ていない。

8. 第三回懸賞競技

『新建築』1928（昭和3）年1月号の巻末に「新建築社第三回懸賞募集計画発表」の記事が掲載されている。大阪市の近郊、夙川附近に建つ建坪30～45坪のいわゆる中流住宅について、建物の様式は設計者の随意とするという条件での設計提案の募集が行われた。

入選発表は同年5月号誌上で行われ、8月号に入選作品の図面とともに新名種夫による「第三回懸賞競技選評」が掲載されている。なお、第二回は商店建築が課題だったので、この稿では触れないこととする。

応募総数は97通で数においては決して少なくはない。様式としては「応募圖案の過半は、横

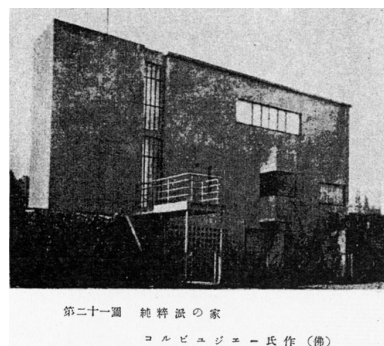


図-12 純粋派 設計ル・コルビュジェ
『新建築』1928（昭和3）年5月号

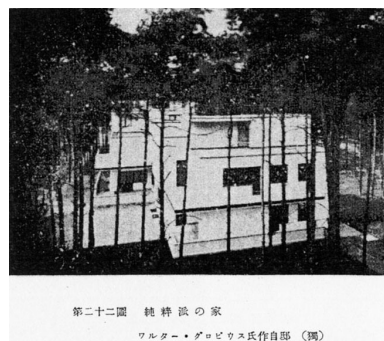


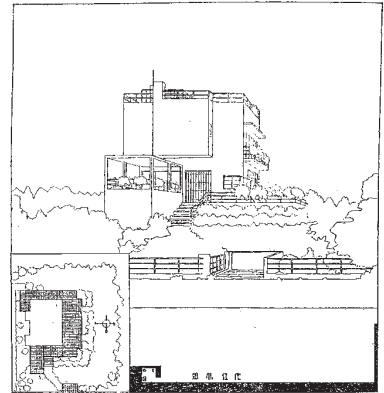
図-13 純粋派 グロピウス自邸
『新建築』1928（昭和3）年5月号

の線を基調とする、所謂現代式鉄筋混凝土造であつた」、つまり鉄筋コンクリート造モダニズム風の住宅であつた。しかし、新名は「質に於ては第一回、第二回に比して非常に劣つて居た」としている。結果として、一等、二等は該当なしとし、入選4作は三等一席から四席としている。三等一席は外観および間取りから図面の取り扱いまでコルビュジエ張りの鉄筋コンクリート造モダニズム住宅の提案である。他の3作は木造住宅であり、ライト調の折衷様式などが選ばれている。

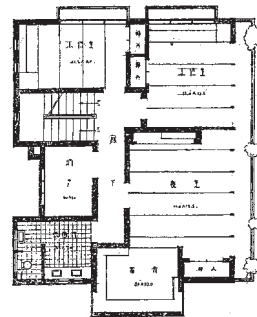
この前年1927（昭和2）年の「小住宅設計圖案縣賞募集」では、応募案のほとんどが木造であり、スパニッシュ系、ミッション系およびイタリアン・ヴィラ、あるいはライト式が多く、コロニアル、バンガローがそれらに次いでおり、コンクリート造近代式は187案中8案のみであつた。それが、1年後の懸賞では応募案の過半が鉄筋コンクリート造モダニズム風になるという様式の大きな変化が見られる。

しかも、前年に最も多かったスパニッシュ系、ミッション系およびイタリアン・ヴィラでも応募案全体の1/4未満で様式のばらつきがあつたが、1年後には鉄筋コンクリート造モダニズム風が過半を占めている。この点について、新名は「バンガローやライト式には飽いたが、スパニッシュやコロニアルは古い」と説明している。当時の住宅の様式が流行の対象であつたことがわかる。さらに「仏蘭西や独逸の住宅の最近の傾向は、日本人の心には餘りにも淋しく感じられる」とし、欧米のモダニズム住宅が当時の日本人の好みに合っていないとしながら、応募案として鉄筋コンクリート造モダニズム風が過半を占めたのは、当時の欧米の新しい住宅のスタイルに対する日本の建築家の関心の高さが現われている。

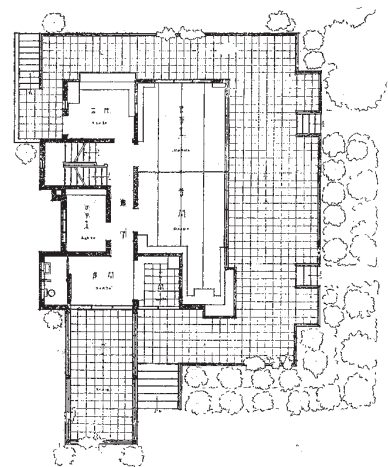
さらに、それらの提案が質としてはあまり高くなかつたことについては、新名は「思想や生活の過渡期に當つて、日本の中流住宅は、今その進むべき方向に迷つて居るのであろうか」と感想を述べたうえで、鉄筋コンクリート造はよほど上手に取り扱わないと住宅としての「平明



配景圖



二階平面圖



一階平面圖

図-14 新建築社第三回懸賞三等一席
『新建築』1928（昭和3）年8月号

とか素朴とか輕快とか温順とかの諸性質」の表現に多くの困難を伴うとしている。応募案の鉄筋コンクリート造モダニズム風の大多数は、ディテールの煩雑や、反対にディテールの極度の省略からくるマスの過重のために、住宅としての諸性質を損なっているとし、「鐵筋混凝土造住宅の將來に、未だ未だ多くの困難の横はつて居ることを示すものである」としている。この時期、日本の建築家の間で欧米のモダニズム住宅への関心が高まっていたが、日本人が近代的な生活を行うための住宅としてはまだまだ十分に適應させるところまでは至っていなかったことがわかる。

9. おわりに

この稿では、雑誌『新建築』の大正末期から昭和初期の記事を見ることにより、当時の関西における住宅設計を取り巻く状況、特に住宅研究誌が一般に対してどのような働きかけを行っていたか、またその中で、モダニズム住宅がどう扱われていたかを明らかにしようと考察を進めてきた。

雑誌『新建築』は、創刊当初は建築全般の中でも特に住宅研究に重点をおいており、それを専門家だけではなく一般にも広めていくことを目的としていた。住宅に関する様々な分野の一般向け解説記事や、「住宅の設計製図の仕方」あるいは「設計問答」などの一般向けのより実践的な記事を掲載している。その中では、明治期以降の和洋「二重生活」の負担から開放され、「文化生活」を送るために和洋を統一した住宅を実現するための知識や方法が主に取り扱われている。それを実現するための和洋を統一的に折衷するための「洋」のモデルとして様々な欧米の住宅様式も紹介されており、その中で当時のヨーロッパでの最新の動きでもあったコルビュジエやグロピウスによるモダニズム住宅も同様に引き上げられていた。特に1928（昭和3）年に行われた懸賞競技でモダニズム住宅の影響を受けた案が圧倒的に増えるなど、この時期に専門家の間でモダニズム住宅への関心が急激に高まっていたことがわかる。ただし、懸賞への応募案の質が高くなかったことからわかるようにこの時点ではモダニズム住宅が日本人の近代的な生活のための住宅として十分に適應できるまでには至っていなかった。

なお、新建築社では大阪三越において1927（昭和2）年10月に『住宅に関する展覽會』、1928（昭和3）年5月に『住みよき家の資料の會』を開催し、最も経済的かつ住みよい家として研究に取り組んできた「組立住宅」の成果として中流住宅一戸とサマーハウス一戸の実物見本を展覽するなど、一般への住宅の知識の普及に努めている。その一方で、雑誌『新建築』に掲載される記事は、次第に欧米および国内の建築家や建築作品の紹介記事が増えていき、一般向けよりは専門家向けの雑誌へと変化していく。特に、1931（昭和6）年に発行所を東京に移転してからは、この傾向がより強くなり、扱う建築の種類も住宅から公共建築や事務所建築などの一般建築へと変っていった。

注釈

- ※1 「雑誌『住宅研究』にみる大正期関西の住宅 —— 阪神間のモダニズム住宅その3 ——」 田中栄治
神戸山手大学紀要9号 p97-108 2007.12.20